（6 月 29 日）「ルツ記 2：14〜18」

それを背負って町に帰ると、しゅうとめは嫁が拾い集めてきたものに目をみはった。ルツは飽き足りて残した食べ物も差し出した。（ルツ記 2 章 18 節）

・昼食の時、ボアズはルツに一緒に食べるように誘います。ただこれは、とても特別な出来事です。ユダヤの人たちは、異邦人と共に食事をしなかったからです。ボアズはこの行為を通して、ルツを自分たちの共同体に受け入れたということになります。

・ボアズの依怙贔屓ともいえる命令を、若い者たちはどう思ったでしょうか。なぜこの「モアブ（異邦人）の女性」は優遇されるのだろうかとは思わなかったでしょうか。ただ当時の主人と僕の関係性をみると、そのようなことを言う余地はなかったのでしょうが。

・それよりもボアズは、ルツが「よそ者」としてひどい目にあわされることを阻止したかったのでしょう。結果的にルツは、1 エファ（23ℓ：二人が一週間ほど食べるのに十分な量）を抱えて帰宅するのです。

（6 月 30 日）「ルツ記 2：19〜23」

モアブの女ルツは言った。「その方はわたしに、『うちの刈り入れが全部済むまで、うちの若者から決して離れないでいなさい』と言ってくださいました。」

（ルツ記 2 章 21 節）

・ナオミはルツに、どこで落ち穂を拾ったのか尋ねます。この「普通だとありえない量」を持って帰ったということは、誰かがルツに目を掛けたとしか考えられません。そしてナオミはまず名前を聞く前に、その人に祝福があるようにと祈ります。

・ルツはナオミの質問に答え、自分はボアズという人の畑で働いたのだと告げます。このときにナオミは、すべてのことが神さまの導きであることを理解したことでしょう。なぜならボアズは、自分の縁続きにあたるからです。

・ルツはそのまま、大麦と小麦の刈り入れが終わるまでボアズの畑に行きました。ボアズのところで働く女性たちから離れなければ、飢えることはないからです。そして 3 章に入ると、ボアズとルツの物語は新たな展開を見せます。

2026 年 6 月

士師記・ルツ記　　通　読

6 月

（6 月　1 日）「士師記 16：23～28」

サムソンは主に祈って言った。「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください。」

（士師記 16 章 28 節）

・サムソンはついに、ペリシテ人に捕らえられました。目をえぐり出され、青銅の足枷をはめられ、牢屋で粉を引かされるサムソン。ペリシテの領主たちはそのサムソンを、見せ物にすることにします。

・よほど、サムソンが憎かったということなのでしょう。ただこの行動が、ペリシテの人たちに不幸を呼びます。「やられたらやり返す」という考え方では、必ず痛い目にあうということです。

・サムソンは主に、「わたしの二つの目の復讐を一気にさせてください」と祈ります。「復讐」という言葉がとても気になります。サムソンにとっては復讐なのかもしれません。しかしペリシテの人たちの感情も理解できます。

（6 月　2 日）「士師記 16：29～31」

それからサムソンは、建物を支えている真ん中の二本を探りあて、一方に右手を、他方に左手をつけて柱にもたれかかった。

（士師記 16 章 29 節）

・16 章 22 節にこのような記述がありました。「しかし、彼の髪の毛はそられた後、また伸び始めていた」。髪の毛が生えることで、主の霊が戻ってくるということのようです。アンパンマンの顔がきれいになると力がよみがえる、そういう感じでしょうか。

・力の戻ったサムソンは建物を支えている柱を押し、その結果、建物は崩れ落ちます。そこには 3000 人もの人がいたそうですが、皆、建物の下敷きになってしまったようです。大惨事と言ってよいでしょう。

・聖書はこの出来事を、サムソンの功績と語っているのでしょうか。このことが美談と語られていく限りは、世の中に争いは続いていくように思います。イエス様はこのような争いを、決して認めてはおられないと思うのですが。

（6 月 27 日）「ルツ記 2：1～3」

モアブの女ルツがナオミに、「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」と言うと、ナオミは、「わたしの娘よ、行っておいで」と言った。（ルツ記 2 章 2 節）

・ナオミは義理の娘ルツを連れて、ユダのベツレヘムに帰ってきました。そこにはボアズという、ナオミの夫エリメレクの一族の有力な親戚がいました。ただこの時点では、ナオミはそのことを知らなかったようです。

・ここでルツはナオミに、畑に行って落ち穂拾いをしてくると言います。レビ記 19 章 9 節には、「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない」とあります。

・その落ち穂は貧しい人や寄留者、寡婦のために残しておきなさいという決まりがユダヤにはあったのです。いわゆるセーフティーネットです。そのことを知っていたのでルツは畑に出かけますが、そこはたまたまボアズの土地でした。

（6 月 28 日）「ルツ記 2：4～13」

どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」

（ルツ記 2 章 12 節）

・ボアズは農夫たちとあいさつを交わします。「主があなたたちと共におられますように」「主があなたを祝福してくださいますように」というやり取りによって、神さまによって生かされているということを確認しているのです。

・ボアズは畑に出て、ルツの姿を見ます。そして召し使いに、彼女の素性を聞きます。ただ召し使いの、「あの人は、モアブの野からナオミと一緒に戻ったモアブの娘です」という言い方には、差別的な思いも見て取れます。

・しかしボアズは、彼女に目を掛けます。よその畑に行く必要はない、若い者にも邪魔させない、水を飲みたかったらいつでも飲めるようにする。ボアズはルツがナオミを見捨てなかったことを知っていました。そこで特別の庇護を与えるのです。

（6 月　25 日）「ルツ記 1：15〜18」

あなたの亡くなる所でわたしも死に　そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」

（ルツ記 1 章 17 節）

・オルパはナオミの言うことを聞き、しゅうとめに別れを告げてモアブに帰っていきました。ナオミはそのことを、「自分の民、自分の神のもとへ帰って行こうとしている」と言います。「自分の」という言葉が繰り返されます。

・冷たく感じるかもしれませんが、ユダヤの人たちが異邦人を受け入れるとも思えず、自分を受け入れてくれる場所に戻りなさいということなのです。しかしそれでも、ルツは帰ろうとしませんでした。

・何がルツを、そこまで頑なにしたのかはわかりません。しかしこの後の展開をみると、ルツがナオミについて行ったから、ある重要な出来事がおこったことがわかります。神さまのなさる業は、そのときには理解できないものです。

（6 月　26 日）「ルツ記 1：19〜22」

ナオミは言った。「どうか、ナオミ（快い）などと呼ばないで、マラ（苦い）と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。

（ルツ記 1 章 20 節）

・10 数年前、ナオミがベツレヘムを離れた時には、夫と二人の息子が一緒にいました。しかしベツレヘムに帰ってきたのはナオミと、モアブ生まれのルツの二人だけでした。満たされていた状態が、うつろになって帰ってきたのです。

・自虐的にナオミは、自分の名前（ナオミ）は「快い」という意味なのでそう呼ばずに、「苦い」という意味の「マラ」と呼ぶように伝えます。神さまによってそのような目に遭ったと言うのです。

・ちなみに新共同訳聖書にある「快い」や「苦い」といった、意味を補完する言葉が、新しい翻訳である「聖書協会共同訳」ではなくなっています。原文にはないというのがその理由ですが、なぜマラと呼ばないといけないのか、意味が分からなくなっています。

（6 月　3 日）「士師記 17：1〜6」

彼が銀を母に返すと、母は銀二百シェケルを取って銀細工師に渡し、彫像と鋳像を造らせた。ミカの家にあったのはそれである。

（士師記 17 章 4 節）

・サムソンの物語が終わった後、イスラエルには士師がいなくなります。王もいないわけですから、誰もイスラエルを裁く人はいないわけです。その結果、人々は自分の目に正しいとすることをおこなうようになります。

・ここで登場するのは、ミカという男です。彼は母親から銀 1100 シェケルを奪ったと告白します。「盗むな」、「父母を敬え」という十戒の二つをすでに破っています。さらに彼は母親に、彫像と鋳像を造らせます。これも「偶像を造ってはならない」に引っ掛かります。

・さらにミカは自分の神殿を持ち、エフォドとテラフィムまで造ります。神さまを冒涜しているようにしか見えません。しかし物語は、彼を中心にして進んでいきます。母親はなぜ、平気なのでしょうか。

（6 月　4 日）「士師記 17：7〜13」

ミカが、「どちらからおいでになりましたか」と声をかけると、彼は、「わたしはレビ人で、ユダのベツレヘムから来ました。適当な寄留地を求めて歩いているのです」と答えた。

（士師記 17 章 9 節）

・ミカの元に、ユダのベツレヘムから一人のレビ人がやってきました。ヨシュア記で書かれたように、レビ人には相続地が与えられませんでした。彼らには神殿などでの働きが与えられていました。

・有力な家系のレビ人には、たくさんの仕事が与えられていたようです。しかしこの彼のように、自分の働き場所を求めて家を訪ね歩く人も多くいたようです。ミカは彼に、好条件を提示します。

・そこでレビ人の若者は、ミカの祭司として仕えることになりました。「レビ人」というステータスを求めていたのでしょうか。いつか牧師も、どこかの家の専属になる日が来るのかもしれませんね。

（6月　5日）「士師記 18：1～6」

祭司は、「安心して行かれるがよい。主は、あなたたちのたどる旅路を見守っておられる」と答えた。

（士師記 18 章 6 節）

・ヨシュア記 19 章 47 節には、「しかし、ダンの人々は領地を奪われた後」という記載があります。ヨシュア記において嗣業の土地が配分されましたが、その場所を追われていたということのようです。

・彼らはどこに住むかを調べるために、5 人の勇士を遣わします。いわゆる斥候です。このようなやり方をしているということは、彼らは平和の内に住むつもりはないようです。先住民を追い払うために、良い土地を探していたのです。

・さて彼らがミカの家の近くに来たときに、若いレビ人の声を聞きます。祭司として働いていたので、何か祈祷でもしていたのでしょうか。彼ら 5 人の勇士は、ミカの祭司に「占い」のようなことを頼みます。

（6月　6日）「士師記 18：7～10」

五人は答えた。「彼らに向かって攻め上ろう。我々はその土地を見たが、それは非常に優れていた。あなたたちは黙っているが、ためらわずに出発し、あの土地を手に入れて来るべきだ。

（士師記 18 章 9 節）

・5 人の勇者（斥候）は、ライシュという地の民を見ます。彼らは穏やかで、安らかな日々を送っていました。普通であれば、「幸せだなあ、いい人たちだ」で終わるところですが、彼らは違いました。

・「よし、ここに攻め込むぞ！」と彼らは意気込みます。穏やかということは、戦い慣れしていないということです。安らかなのは、土地の実りが豊かで争いが起こらないからに他なりません。

・こう考えてみると、何が幸せなのか、難しいところです。大河ドラマなどをみていても、あまりに豊かな町になってしまうとかえって危険が増すことがあります。戦国時代ではよくあることのようです。

（6月 23 日）「ルツ記 1：1～7」

士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。

（ルツ記 1 章 1 節）

・今日からルツ記に入ります。ただ冒頭に「士師が世を治めていたころ」と書かれているため、士師記と並行して起こった出来事のようです。ただしどの士師の時代かは、わかっていません。

・そのころユダのベツレヘムを飢饉が襲います。ベツレヘムという言葉には、パンの町という意味があります。しかしそこでも、食料がなくなるのです。そこでエリメレクとナオミという夫婦はマフロンとキルヨンという二人の息子を連れてモアブに行きます。

・モアブの地には、異邦人が住んでいました。本来イスラエルの人たちは、そのような場所には行きません。しかし背に腹は代えられないのでしょう。モアブの地に住み、そして息子たちはそこで異邦人であるモアブの女性を妻とするのです。

（6月 24 日）「ルツ記 1：8～14」

二人はまた声をあげて泣いた。オルパはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった。

（ルツ記 1 章 14 節）

・ナオミは二人の息子の妻、オルパとルツに対して自分の生まれ故郷に帰るように言います。二人の息子が死んだ今、残されたのは三人の女性でした。ナオミは故郷ユダに戻ろうとします。それは主がその民を顧み、食べ物をお与えになったと聞いたから（6 節）です。

・ユダはイスラエルの地なのでナオミは受け入れられますが、異邦人であるオルパとルツは受け入れられるかどうか分かりません。だからナオミは二人に対して、生まれ故郷に帰り新しい嫁ぎ先を得なさいと諭すのです。

・この時代、やもめと呼ばれる夫を亡くした女性たちには、とても厳しい生活が待っていました。他の人たちからの庇護がなければ、生きていくのも容易ではありませんでした。そのためにナオミは二人に帰るように説得しますが、ルツはそれでもついて行くのです。

（6 月 21 日）「士師記 21：13～19」
ベニヤミンがこのとき帰って来たので、彼らはギレアドのヤベシュの女たちの中で生かしておいた娘たちをベニヤミンの人々に与えた。しかし、まだ足りなかった。 （士師記 21 章 14 節）

・リモンの岩場にとどまっていたベニヤミンの人々600 人に対して、イスラエルの共同体は和解を申し出ます。そしてヤベシュの女性 400 人を彼らに与えます。ベニヤミンの子孫を残すためです。
・しかし聖書は、「まだ足りなかった」と書きます。確かに 600 人に対して 400 人なので、200 人足りません。ただ足りないからといって、何の問題があるのでしょうか。一人でも子孫が生まれれば、それで十分なように思いますが。
・イスラエルの人たちは頑なに誓いの言葉を守っていきます。しかし同時に、抜け道を探っていきます。そして彼らは、シロでの主の祭りを利用することにしました。何としてでもベニヤミンの人たちに妻を与えたい！、それなら最初から戦わなければいいのですが。

（6 月 22 日）「士師記 21：20～25」
ベニヤミンの人々はそのようにした。彼らは踊っている女たちを奪い、その中から自分たちの数だけ連れ去って、自分の嗣業の地に帰り、町を築き、そこに住んだ。 （士師記 21 章 23 節）

・イスラエルの人たちがベニヤミンの人たちにした提案は、このようなものでした。シロでの主の祭りの際、ぶどう畑に行ってシロの娘が踊りに出てくるのを待ち伏せしなさい。そして妻にしようとする者を捕まえ、持ち帰りなさい。
・これって、拉致ですね。そんな事をされるくらいなら、ちゃんと正式な形で妻として与えた方がいいと思うのは、わたしだけでしょうか。祭りから帰って来ないなあと心配していたら、「あの娘、嫁になってたよ」って。
・そして士師記は、「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた」という一文で終わります。わたしたちの心がモヤモヤしているのと同じように、神さまもモヤモヤしておられたのではないでしょうか。

（6 月　7 日）「士師記 18：11～20」
土地を探り歩いた例の五人は上って入り込み、彫像、エフォド、テラフィム、鋳像を奪った。祭司は武器を身に帯びた六百人と共に門の入り口に立っていた。 （士師記 18 章 17 節）

・5 人の勇士から話を聞いたダンの氏族 600 人は、武器を身に帯びて陣を敷きます。そしてまず、ミカの家に向かいます。5 人の勇士はダンの人たちに、エフォドとテラフィムがミカの家にあることを告げます。
・ここまでに何度も出てきているエフォドとテラフィムとは、簡単にいうと「偶像」です。ミカと若いレビ人は、その偶像に対して仕えていました。いわゆる偶像崇拝です。そしてダンの人たちはエフォドとテラフィム、そして彫像と鋳造を奪いました。
・彼らはあわせて、ミカの家で祭司の働きをしていたレビ人も連れて行こうとします。個人の家の祭司より、ダン族の祭司になる方がいいのではないかというのが、彼らの言い分です。そして若いレビ人は、その提案を“快く”受け入れるのでした。

（6 月　8 日）「士師記 18：21～26」
ミカは、「あなたたちはわたしの造った神々と祭司を、奪って逃げた。わたしにはもう何もない。何事かとはよく言えたものだ」と言った。 （士師記 18 章 24 節）

・ダンの人たちは、ミカの彫像、エフォド、テラフィム、鋳造、そして祭司を奪いました。ミカは家族の者を呼び集め、ダンの人たちに追いつきます。自分たちの物が奪われたのですから、当然の行動のように思えます。
・そのときにミカは、「わたしの造った神々と祭司」と言います。つまり自分が「偶像」を造ったということを認めているのです。イスラエルにおいて、偶像を造り拝むことは大きな罪でした。
・ミカはダンの軍勢が自分たちよりも強いことを悟り、奪われた物を取り返すことを諦めます。ミカが犯した罪が、ダン族の元に移ったともいえます。この頃そのような罪が、イスラエルのあらゆる場所にはびこっていくのです。

（6 月　9 日）「士師記 18：27～31」

彼らはミカが造った物と彼のものであった祭司を奪って、ライシュに向かい、その静かで穏やかな民を襲い、剣にかけて殺し、町に火を放って焼いた。

（士師記 18 章 27 節）

・ダンの人たちは、多くの罪を重ねていきます。静かに暮らしていたライシュの穏やかな人たちを襲い、その町を奪ってしまいます。そして自分たちが拝むための彫像を、その町に建てるのです。
・エルサレムに神殿がまだなかったころ、宗教の中心地はシロでした。ただイスラエル 12 部族の心は一枚岩とは言えませんでした。サムソン以降、士師も立てられず、彼らは「飼い主のいない羊」のようになっていました。
・ダン族の罪は、聖書の中では問われることはありませんでした。しかし明日以降の物語を読むと、神さまとイスラエルとの関係がかなりひどくなっていくのがわかります。罪を重ねる人間の姿を、神さまはどのように思っていたのでしょうか。

（6 月　10 日）「士師記 19：1～8」

夫は若者を伴い、一軛のろばを連れて出で立ち、彼女の後を追い、その心に話しかけて連れ戻そうとした。彼女が彼を父の家に入れると、娘の父は彼を見て、喜び迎えた。　（士師記 19 章 3 節）

・19 章も 18 章と同じように、「イスラエルに王がいなかったそのころ」という言葉から始まります。王が誕生するまでの一番ゴタゴタしている時期、ということです。登場するのは一人のレビ人です。
・彼には側女（正式な妻ではない女性）がいました。しかしその側女は主人であるレビ人を裏切り、父の家に帰ってしまいます。側女を追ってレビ人はその家に行くのですが、側女の父はレビ人を喜び迎えたそうです。
・今であれば DV などを疑い、簡単には娘に会わせないところでしょう。ところがこの父は、何晩もレビ人一緒に食べて飲み、泊まらせます。側女はというと、一言も語っていません。とても不思議な状況の中、物語は進んでいきます。

（6 月　19 日）「士師記 21：1～4」

イスラエル人はミツパにおいて、「我々はだれも自分の娘をベニヤミンに嫁として与えないことにする」と誓った。

（士師記 21 章 1 節）

・イスラエルの人たちは、ベニヤミン族に自分の娘を嫁として与えない誓いを立てます。これだけの戦いをして血を流したわけですから、その誓い自体は理解できないわけではありません。
・しかしその直後に、「イスラエルの神、主よ。なぜイスラエルにこのようなことが行われ、今日イスラエルから一つの部族が欠けることになったのですか」と叫ぶのは、どういう思いからなのでしょうか。そう思うのであれば、誓わなければいいのになと思います。
・勢いあまって誓ったものの、よく考えたらこれはとんでもないことだったと思いなおしたのでしょうか。「誓うな」という十戒の意味が分かるような気がします。イスラエルの人たちは、主に和解を求めます。

（6 月　20 日）「士師記 21：5～12」

これがあなたたちのなすべきことである。男はもとより、男と寝たことのある女もすべて滅ぼし尽くさなければならない。

（士師記 21 章 11 節）

・「さあ、ベニヤミン族が消えてなくならないためには、どうしたらいいでしょうか？」。一休さんだったらきっと素晴らしいとんちの力で、誰もが笑顔になるような解決方法を示してくれることでしょう。
・ところがここでは、とても恐ろしい方法が取られました。主の御前における集会に上ってこなかった住民を調べ、その人たちを処女の娘以外滅ぼし尽くすというのです。調べると、ヤベシュの人たちが集会に出ていなかったことがわかりました。
・イスラエルの人たちは、ヤベシュの人たちを剣にかけます。そして処女の娘 400 人をカナンの地にあるシロの陣営に連れ帰ります。まったくの人権無視です。これが「めでたし、めでたし」ということなのでしょうか。

（6 月 17 日）「士師記 20：29～36」

全イスラエルのえり抜きの兵士一万人がギブアに向かって進撃し、激戦となった。ベニヤミンの人々は自分たちに不幸な結末が訪れるとは思ってもみなかった。

（士師記 20 章 34 節）

・イスラエルとベニヤミンとの戦いも、三日目に入ります。初日と二日目はイスラエルの兵 40,000 人が倒れ、戦いはベニヤミン優勢のようにも見えます。しかし主はイスラエルに対し、ベニヤミンをあなたの手に渡すと約束されていました。
・イスラエルの人々は、策を講じます。その結果イスラエルのえり抜きの兵によって、ベニヤミンの兵 25,100 人が打ち滅ぼされます。ベニヤミンの兵はえり抜きの兵士を入れて 26,700 人でしたから、大半が敗れたことになります。
・初日、二日目とスイスイ戦いに勝利していく中で、ベニヤミンの人たちには油断もあったことでしょう。そして主が、イスラエルに勝利を約束していたことも、忘れてはいけません。戦いは終わりました。

（6 月 18 日）「士師記 20：37～48」

六百人が荒れ野のリモンの岩場に逃げて、四か月、そこリモンの岩場にとどまった。

（士師記 20 章 47 節）

・37 節以降には、29 節以降の三日目の戦いの様子が繰り返し書かれています。ただそこにはベニヤミンが振り返ると町全体が火に包まれ天に燃え上がっていたことや、どこで何人の人が倒れたのかなどが詳しく報告されます。
・さて、ベニヤミンの兵は大半が戦死してしまいました。しかし中には生き残った者もいたようです。その数は 600 人でした。彼らはリモンの岩場に逃げ込み、4 ヶ月もの間、そこに留まります。
・そのほかのベニヤミンの人たちは、イスラエル人によって残らず殺されてしまったようです。旧約聖書には、この「滅ぼし尽くす」場面がよく出てきます。何度見ても、心が痛くなります。

（6 月 11 日）「士師記 19：9～21」

彼らはギブアに入って泊まろうとして進み、町の広場に来て腰を下ろした。彼らを家に迎えて泊めてくれる者はいなかった。

（士師記 19 章 15 節）

・レビ人（主人）と若者と側女は、ようやく出発します。自分の郷里に向かって行ったのでしょう。しかし出発した日も夕方まで飲み食いをしていたために、家に着く前に日没の時間になってしまいました。
・当時エルサレムはエブスと呼ばれ、異国人が住む町でした。そこで彼らはベニヤミン領のギブアまで行きます。ベニヤミンはイスラエル民族でしたので、そこまで行けば安心だと思ったのでしょう。
・しかし彼らを泊めてくれる人は現れず、彼らは広場で腰を下ろしていました。「寄留者には親切にするように」という戒めを、誰も守ってはいなかったのです。ただ一人、エフライム出身の老人だけが彼らを迎え入れます。

（6 月 12 日）「士師記 19：22～26」

彼らがくつろいでいると、町のならず者が家を囲み、戸をたたいて、家の主人である老人にこう言った。「お前の家に来た男を出せ。我々はその男を知りたい。」

（士師記 19 章 22 節）

・家の中でくつろいでいる彼らの元に、町のならず者がやってきて家を囲みました。「我々はその男を知りたい」、このやり取りは、創世記 19 章のソドムの町の男たちがロトと御使いに対して「ここへ連れて来い。なぶりものにしてやるから」と言った場面と似ています。
・この時代、いわゆる「同性愛」は大きな罪とされていました。ソドムもギブアも、その罪にまみれていたということです。ただそのならず者の申し出に対して老人が言った言葉にも驚かされます。
・「わたしの娘とこの人の側女を差し出す」。このような申し出は、女性蔑視と取られても仕方ありません。しかも側女の主人である男（レビ人）は側女を外に押し出して、彼女をならず者の好きにさせます。朝までこの主人は、側女を助けようともしないのです。

（6 月 13 日）「士師記 19：27～30」

家に着くと、彼は刃物をとって側女をつかみ、その体を十二の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつけた。 （士師記 19 章 29 節）

・側女が一晩中朝になるまでならず者にもてあそばれている間、主人は何をしていたのでしょうか。「主人が朝起きて」という記述から、彼は眠っていたということがわかります。よく眠れるな、というのが正直な思いです。

・さらに彼は、「起きなさい。出かけよう」と側女に声を掛けます。答えがなかったということは、すでに息を引き取っていたのでしょう。そして彼は彼女をろばに乗せ、自分の郷里へと向かいます。そして家に着いて、さらに恐ろしいことをするのです。

・彼は側女を 12 の部分に切り離し、それをイスラエル全土に送りつけます。12 はイスラエル民族の数です。まるで自分が被害者かのようにふるまうこの主人の態度を、わたしたちはどのように思うのでしょうか。そしてこの出来事が、イスラエルを大きく変えていくのです。

（6 月 14 日）「士師記 20：1～11」

わたしは側女をつかみ、その体を切り離して、イスラエルの嗣業の全耕地に送りました。彼らがイスラエルの中で極悪非道なことをしたからです。

（士師記 20 章 6 節）

・ギブアのならず者が犯した罪は、イスラエルの人々の耳に入ることとなりました。レビ人である側女の主人がその体を 12 に分け、それぞれの部族に送り届けたからです。イスラエルの人たちは、怒りを共有します。

・ただ 19 章を改めて読むと、その怒りは仕組まれたもののようにも感じます。そもそもギブアの人の前に側女を差し出したのはその主人であり、また夜、助けることもしなかったわけですから。

・しかし結果的に、イスラエルの人たちは皆、一人の人のように連帯を固めます。もしこの物語が神さまのご計画の中でおこなわれたものだとすれば、その目的はここにあるのかもしれません。ただ犠牲になった側女が、あまりにもかわいそうです。

（6 月 15 日）「士師記 20：12～18」

かえってベニヤミンの人々は町々からギブアに集まり、イスラエルの人々と戦おうとして出て来た。

（士師記 20 章 14 節）

・イスラエルの人たちは、ギブアで犯行に及んだならず者を差し出すように、ベニヤミン族に伝えます。しかしベニヤミンの人たちは、ならず者の引き渡しには応じませんでした。それだけ罪が蔓延していたということでしょう。

・ベニヤミンの人たちから見たら、他の部族だって自分たちとそれほど変わらない、そう思ったのかもしれません。自分たちも罪を犯しているくせに、どうして人に対して批判ばかりするのか、その思いもあったでしょう。

・ベニヤミンには剣を携えた兵士 26,000 人、そしてえり抜きの兵士 700 人がいました。しかしイスラエルには兵士 400,000 人がおり、彼らはすべて軍人だったそうです。結果は火を見るより明らかのように思えます。

（6 月 16 日）「士師記 20：19～28」

イスラエルの人々は主の御前に上って、夕方まで泣き続け、主に問うて言った。「兄弟ベニヤミンと、再び戦いを交えねばなりませんか。」しかし、主は言われた。「彼らに向かって攻め上れ。」

（士師記 20 章 23 節）

・戦いの火ぶたは切って落とされました。ベニヤミンの人たちはイスラエルの兵を、初日は 22,000 人、二日目は 18,000 人も地に打ち倒しました。二日合わせて 40,000 人、イスラエルの兵の 10 分の 1 がやられた計算になります。

・イスラエルの人々は、主の御前に座り込んで泣きます。それは戦いの状況が厳しいからではありませんでした。イスラエルの人々にとって、ベニヤミンの人たちはいわゆる「同胞」、なのです。

・その人たちと戦わざるを得ないことに、彼らは心を痛めているのです。「兄弟ベニヤミンと、再び戦いを交えねばなりませんか」という言葉の裏には、できれば戦いたくないという思いが見て取れます。しかし主は、「攻め上れ」と命じます。